

Japanese - Birthmarks

あざ



あざ

重要ポイント

- あざはめずらしくない
- 原因は分かっていない
- ほとんどの場合健康に影響はない
- ほとんどの場合治療の必要はない
- 多くの場合時間が経つにつれて薄れていく

症状

出生児によく見られる皮膚の変色には多くの種類があり、総称して「あざ (birthmark)」と言います。多くの場合もともと皮膚に存在する組織、たとえば血管（この場合を血管痣もしくは **haemangioma** という）や色素細胞（この場合を痣もしくは **mole** という）などの過剰生成が原因です。原因は分かっていません。ほとんどの場合問題を起すことはなく、治療の必要はありません。

あざの種類、発生個所、治療法

血管痣 (haemangiomas)

もっとも一般的な血管痣はサーモンパッチもしくは“コウノトリのつつき跡”とよばれる、首の後ろにある平坦な赤い斑点で、出生児の50%近くに見られます。頭や首の他の部分に見られることもあります。顔の痣は大半が五年以内に消えますが、首の後ろのあざは残ることが多いです。

血管痣が隆起している場合は真性の **haemangioma** (いちご状母斑ともいう) で、出生時に見られるサーモンパッチと異なり、出生の数ヶ月後に現れます。六ヶ月間に急速に成長し、5ミリから数センチメートルの大きさの柔らかい隆起した赤い部分となります。この種の **haemangioma** は乳幼児の10%ほどに見られ、ほとんどの場合、何も治療せずに縮小し消失します。まれに目の周りや鼻や口などの特定の個所にできて急速に成長している場合は治療が必要なことがあります。このような大きな **haemangioma** は、医師が処方する極く短期間の経口コルチゾン療法で成長が止まる場合が時々あります。

色素班

色素班はもともとある色素細胞 (メラニン細胞) の量が増えることで起こります。もっとも良く見られるのは蒙古斑です。これは平坦な灰茶色もしくは灰青色の部分で、腰の部分にもっとも多く見られます。出生時に存し、害はありません。皮膚の色の濃い乳幼児に多く (アジア人の子供の90%に対し、アングロサクソンの子供は5%)、時間が経つにつれて消失します。

Japanese - Birthmarks

先天的メラニン細胞母斑（出生痣）は出生時もしくは生後数ヶ月の間に現れる無害な色素細胞の増殖です。大きさは数ミリから数センチメートルまで様々で、隆起している場合もあります。目で簡単に確認できます。平坦な蒙古斑と違い、触って確かめることもできます。

出生時に現存する痣はほとんどの場合癌化する危険はなく、なんら治療の必要はありません。しかし、非常に大きなもの（幅20センチ以上）は皮膚癌の危険因子である可能性があります。このように大きな痣の治療法としては外科的除去術やレーザー治療などがあります。

そばかすは色素細胞（メラニン細胞）によって作られる色素の増加によるもので、普通出生時には見られません。幼児期に普通ないし大量の太陽光線を浴びると、もっとも多く日にさらされた部分（たとえば頬、手の甲、前膊の外側など）にできます。効果的な日焼け防止策により防止できる場合があります。出生時には無く、幼児期から思春期にかけて現れることが多いです。

より詳しい情報の入手先：

母子健康看護師

かかりつけの医師

皮膚科専門医

© 2002, Department of Dermatology, St. Vincent's Hospital Melbourne, Victoria Parade, Fitzroy, Victoria 3065 Australia.